『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第６６回】

亭主に浴びせられる女房の問いのうち、いちばん難しく、やっかいなものはなんでしょう？　おそらく 90%以上のご亭主サマが賛同されるのが「ねェ、何食べたい？」ではないでしょうか。そういうとき、きまって発せられる返事は「なんでもいいよ」― 。これも同意されるはずです。そして返ってくるのは、「毎日毎日、食事作るのは大変なんだから」という女房殿の嫌みを含んだ非難のお言葉。世のご亭主のみなさま、ご心労をお察しいたします。お疲れさまです。

そうなんです。女性のみなさま、よくお聞きください。男性にとって食事のメニューを聞かれることほど困ることはない ― と言ってもいいのです。なぜか。頭の中に食事メニューの「引き出し」が少ないからです。わたしの場合、野球やサッカーに関する引き出しなら自慢するほどあるのに、食いものの引き出しは本当にわずかなのです。すぐ思い浮かぶのは、「カレー」「ラーメン」「うどん・そば」「野菜炒め」「焼きそば」… くらいなものです。全部自分で作れます。養護学校の校外学習や調理実習で調理方法を身につけました。でもよく考えると、みんなインスタント食品にもあるもの。料理作りを面倒とは思わず、それどころか創意・工夫をしながら作る楽しさを知っている男性なんて、わたしの友だちには一人もいません。

きょうはお料理の話ではありません。イエスさまのメッセージを読み解くのがいかにむずかしく、おもしろいか ― というお話をしようと思います。

✞　『必要なものはただ一つだけ』　―『ルカ』10 章 38～42 章 ―

『ルカ』10 章をお読みください。

……

38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエ
スを家に迎え入れた。39 彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その
話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そば
に近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思
いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」 41 主はお答えになった。「マ
ルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。 42 しかし、必要なことはただ
一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

……

この家には、マルタという姉とマリアという妹がいました。「いま村中（むらじゅう）で噂になっているイエスという人のお話を聞けるチャンスなんて、めったにあるもんじゃないわ」と、イエスの話に耳を傾けるマリア。一方、イエス一行をもてなすために「イエスさまは何がお好きなんでしょう？　お弟子さまたちは …」と、いろいろ悩みながら忙しく食事の準備をするマルタ。彼女は猫の手も借りたいくらいなのに、何もしないでイエスの話を聞いている妹を見てついに爆発しました。「イエスさま、私だけ働かせて何もしない妹をどう思います？　手伝うようおっしゃってください！」と、イエスに直談判します。イエスは「あなたはずいぶんイライラしていなさるが、これだけはしなくてはならないことというのは一つなんだよ。マリアはそれを選んだのさ。」と答えました。一生懸命、イエスさま一行のために働いているマルタに対する答えとしては、ちょっと冷たいような気がしませんか？　「ありがとう」や「ごくろうさま」ぐらい、声をかけてやってもいいのでは … と思いますよね。この「マルタとマリアの話」については、いろいろな解釈がありますので、いくつかご紹介いたします。

「ただ一つ必要なもの」とは〈信仰〉である

これまで何回かご登場いただいた無教会主義キリスト教の矢内原忠雄先生は、マルタがイエス一行のために食事の準備をした ― という家庭生活上のできごとを通してイエスが教えたことは、人生の根本問題に触れているとされます。

先生はまず、マルタが「多くのことに思い悩み、心を乱していること」がよくないと指摘されます。人間がいろいろな仕事をし、たくさんの活動をすること自体は悪いことではないけれど、たくさんの仕事ができる人は時として、自分の活動を誇りたがり、あまり仕事をしない人を軽蔑し、その人たちに対して「なぜしないのか」「なぜできないのか」と見下すことがある ― と。

働き者のマルタは、何もせず、ただイエスさまの話を「聞いているだけ」のマリアが許せなかったわけです。「私はこんなにがんばっているのに」、「私はこんなに他者に親切にしているのに」、「私はこんなにルールを守っているのに」…。私たちも毎日の生活の中で、こんな思いをいだいくことがあると思います。その人がしていることは良い事であり、他者のためにもなっているのですが、その意識がいつの間にか「必要以上の誇り」になり、無意識のうちに自分のようにやらない(できない)他者を軽蔑したり、非難してしまうことがあります。『多くの仕事をしたからといって、心に満足と喜悦をもつことはできない』。先生は、もしマリアが病身であったと仮定すれば、イエスの足もとに坐って話を聞くことにより、彼女はなくてはならぬ唯一の善きものをいただき、『活動家にまさってイエスに仕え、イエスを喜ばせるのであり、また自分自身イエスの愛に満ち足りることができ』た女性であったのではと考えます。

また、イエスが言う『必要なことはただ一つだけ』の「一つ」とは、『それは「信仰」である。イエスの御言葉を聞いてこれに心を寄せ、イエスの足もとに座ってその愛を受けるということ、ただそれだけである。何の仕事をすることができなくても、イエスに寄せるこの信仰と愛さえもつならば、(中略) 人生の喜悦と平安に満ち足ることができる』とされます。そして、『ただ静かに神によりたのむこと。これが (中略)「なくてはならぬ唯一つのもの」なのである。イエスに仕える最善の道は、イエスを愛し、イエスに愛されることにある。イエスに対する関係においては、与うるよりも受くることが幸福なのである』と、矢内原先生は締めくくっておられます。

イエスは「人と自由につながる一歩」を説いた

この個所を『信じる気持ち　はじめてのキリスト教』という入門者向けの本をお書きになった富田正樹先生(同志社香里中学校・高等学校宗教部主任)が、「日本キリスト教団枚方くずは教会」(プロテスタント派。大阪府枚方市)で、中学生にもわかる説教としてお話ししています。

マルタは女性に期待されていた役割を一生懸命やっていたまじめな女性でした。この時代のユダヤ社会は徹底した男尊女卑で、女性は男性の私有財産とされ(第 63 回参照)料理や家事ができ、基本的には家の中から出ないで、夫や子供の世話をしていればいいという位置づけでした。つまり、「良妻賢母」であることが期待されていたのです。この話でもマルタはイエス一行の足を洗う水や手ぬぐいを用意し、食事をつくり … と、自分の女性としての務めをこなしていました。ところが妹のマリアはそれをやらず、イエスの話に聞き入っていました。マリアのしていることは当時の女性としての役割を果たしていないにもかかわらず、イエスは『マリアは良い方を選んだ』と言ったのですから、マルタの面目は丸つぶれです。

富田先生は、イエスは『女とはかくあるべき、男とはかくあるべき、そんな風に人間に鋳型をはめ、女と男を隔てている壁を打ち崩し、自由に出会い、自由に心を開いて話し、自由に友人となる。そんなつながりの方を、快適なもてなしでくつろぐよりも大切なこと、必要なこととした』と解釈されます。イエスのやり方はいつもこんな調子で『古い生き方に縛られている人が、ぎょっとした

り、むっとしたりするようなやり方で、問いを投げつけてしまう。それがイエス流』だと考えます。

このような形でイエスが女性を解放していった結果、女性の賛同は得ましたが、『男性たちに「伝統的な家庭や社会の秩序を揺るがす者」として恐れられるようになり』、そんなイエスに憎しみを抱くようになった男性たちが後日、「十字架にかけろ」と叫ぶ群衆になった ― とされます。また、キリスト教会は『およそ 2000 年近くにわたって男性支配的な教会組織を築き、女性の尊厳を認めず、良妻賢母型の女性になることを奨励してき』たと指摘しています。イエスが語った「人との自由なつながり」の意義が再発見されたのは、つい最近のことです。先生は、『私たちは、もう一度聖書を読み直し、イエスの自由にならって、自らも自由に生き、自由に人と出会い、自由に人とつながる一歩を踏み出してもよいのではないでしょうか』と結んでいます。

「ただ一つ必要なもの」とは「言葉への聴従」である

荒井献先生(新約聖書学者。東京大学・恵泉女子大学名誉教授)は、この話の中で『マリアの役割は、信徒に「ただ一つ」「必要」とされる「言葉への聴従」』であり、『マルタを介して退けられているのは、信徒が日常生活のことで「思い悩み、心を乱す」姿である』とされます。これは「種を蒔く人」のたとえ話におけるイエスの説明を読めばよくわかると書かれているので、『ルカ』8 章を読んでみましょう。

……

5「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、
空の鳥が食べてしまった。 6 ほかの種は石地に落ち、芽は出たが、水気がないので枯れてしまっ
た。7 ほかの種は茨の中に落ち、茨も一緒に伸びて、押しかぶさってしまった。 8 また、ほかの種
は良い土地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」 イエスはこのように話して、「聞く耳のある
者は聞きなさい」と大声で言われた。(中略) 11 「このたとえの意味はこうである。種は神の言葉
である。 12 道端のものとは、御言葉を聞くが、信じて救われることのないように、後から悪魔が
来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである。13 石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け
入れるが、根がないので、しばらくは信じても、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことであ
る。 14 そして、茨の中に落ちたのは、御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆い
ふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちである。 15 良い土地に落ちたのは、立派な善い心
で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結んだ人たちである。」

……

「種」は「神さまのことば」、「種を蒔く人」は「神さまのことばを伝える人」、「土地」は「神さまのことばを受け入れる人」をそれぞれ示唆しています。これを冒頭の『ルカ』10 章のマルタとマリアに重ねてみると、『御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快楽に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たち』(8-14)が『多くのことに思い悩み、心を乱している』マルタ(10-41)であり、『立派な善い心で御言葉を聞き、よく守』る(8-15)人が、イエスの『話に聞き入っていた』マリア(10-39)にあたることがおわかりになると思います。

そして荒井先生は、『現代における私ども男と女に、伝統的役割分業意識からの解放と、それに基づく男女の新しい関係の創始を促すという、極めて現代的メッセージをも提示していることになるのではないか』とされています。これは富田先生の話と共通するものがありますね。

「よくある話をでっちあげたルカさん」

以前ご紹介した米田彰男先生が長年、大学の演習(ゼミ)で用いている本として、大貫隆先生の『イ

エスという経験』、山浦玄嗣先生の『ガリラヤのイェシュー』などと共に、田川健三『イエスという男』を挙げられています。わたしは5年前に購入したのですが、数ページ読んだだけで「こりゃ、読まない方がいいのでは …」と、当時のわたしの信仰を揺るがせかねない内容だったため、しばらくの間「積ん読」だけでした。何しろ、自らを「神を信じないクリスチャン」と称する先生です。まだ先生の著作をこの本しか読んでいないわたしには、どういう意味かわかりません。国際基督教大学に勤めていた頃、礼拝のとき講壇から「神は存在しない」、「存在しない神に祈る」と説教し、「造反教官」として追放されたという経歴の持ち主でいらっしゃいます …。

その田川先生に言わせると、この話は次のようになります。先生は『よろしくないのは … その程度のよくある会話を元にして、そこから宗教説話をでっちあげたルカさんの説教精神であって…』と、福音書記者・ルカを一刀両断。また、イエスが家事労働蔑視や男女差別の撤退を視野に入れていたとする説も、『イエスの死後かなり後になってでっちあげられた宗教説話だろう』と、荒井先生らの説に歯に衣着せぬ批評をなさっています。そして、この話がまったく事実無根であったかどうかは分からないけれど、妹がイエスの話を聞き、姉が「すこしは手伝うように言ってください」と訴えた ― などという話はどこにでも見かける風景であり、それだけのことにすぎないことだとされます。ただ、この話がもとになって(キリスト教の専売特許ではないにしろ)、以後二千年の歴史を通して、家事労働軽視の風潮をもたらしたのも事実であるとする点では、富田・荒井両先生の考えと共通点がみられます。

田川先生は、マリアのほかにもイエスの話を理解する能力、資質、姿勢 … があった女性が何人も聖書に登場しているのを指摘し、彼女たちとイエスの間に『多彩で豊かな感情が交錯していたにちがいない情景をイエスの生活の雰囲気として常に想像しながらイエス像を描くのでないと、この男を、此の世ならぬ薄っぺらな宗教観念に還元することになってしまう』と、安易に「説教家・イエス」像をつくりあげることに警鐘を鳴らしていらっしゃいます。先生の著作への評価はさまざまで、その著作は他の聖書学者や教会、聖書記者に対する侮辱に満ちており、今までのイエス像を覆すような過激な内容であると批判する人たちや、逆にその知識の豊富さと論理性を評価する人たちの両極端に分かれているようです。

イエスが何を私たちに語ろうとしたのか ― を読み解こうとするとき、いろいろなアプローチの仕方があり、さまざまな解釈があります。「正解」をイエスに聞くわけにはいきません。私たちにできることは、毎日の身近な出来事や人との出会いの中に秘められているイエスの「お前さんはどう生きるの？」という「問いかけ」を拾い集めることではないでしょうか。それらの問い対して、「あぁ、こんなイエスさまの御言葉があったなァ …」と思い当たり、新たな気づきを感じるとき、私たちの人生はまた一歩、イエスが望まれる姿に近づくのかな … と、わたしは思っています。

ご亭主のみなさん、「食べたいもの」がすぐ頭に浮かぶように「引き出し」をたくさん作りましょう。その中から「いちばん食べたいもの」を女房殿にご提案いたしましょう。

神さま、私たちがあなたの言葉に耳を傾け、生かされている人生の中で「必要なこと」を知ることができますように。

【引用・参考にした書籍など】　・矢内原忠雄 『聖書講義Ⅱ　ルカ伝 上』(岩波書店、1978)
・新共同訳『聖書』　・田川健三 『イエスという男　第二版〔増補改訂版〕』(作品社、2012)
・富田正樹 『自由と恐れ』(2010.11.21.日本キリスト教団枚方くずは教会主日礼拝宣教より)
・荒井 献 『イエス・キリストの言葉 福音書のメッセージを読み解く』(岩波現代文庫、2014)
・米田彰男 『寅さんとイエス』